

## 事業実施本部長 挨拶

Society 5.0 という用語を最近よく聞く。これは第 5 期科学技術基本計画の中で提唱された未来社会のコンセプトを表す（日本の）造語である。5.0 というバージョンを意味すると思われる数字は社会の基盤様式または文明の程度を示し、Society 1.0 の段階は狩猟・採集社会、2.0 は農耕社会、3.0 は工業社会、4.0 は現代の情報社会のそれぞれの水準を指すという。Society 5.0 で実現する社会では、人々と PC や家電製品などのモノとがインターネットでつながり（IoT）、それらの使われ方を含め、地球上のあらゆる事象や人間活動の情報が自動的にくまなく継続的にビッグデータとしてサーバーに集まる。そして、そのビッグデータを人工知能（AI）が解析し、その結果、AI がロボットを操り、人間の役に立つ仕事をするという。職種によっては、現在人間がしている仕事を AI とロボットが乗っ取り、2045 年には AI の能力が人間の能力を上回る転換点（シンギュラリティ）がやってくるという、私にはにわかに信じがたい予測がある。

上記のように予測される近未来の社会状況と文明の変化について、当然その変化をもたらし、変化に適応していくのは人間自身である。しかし一方では、現在すでに表出している地球環境問題等を含め、これから急速に変化・変質していく社会で新たに惹起する様々な問題も平行して解決していかなければならないのも人間である。人間はいつの時代もその時宜に応じて高度な智慧と創造力、行動力、そしてたくましく幸福に生きていく力を身につけることが求められる。大学はそのような知識と能力をもつ人材を育成する責任がある。

大学は常に社会に対して教育の成果を説明しなければならない。設定した DP を実現するため、CP を組織的に実行していることの点検・評価はもとより、個々の教員の授業の内容やアクティブラーニングを含む教育方法、成績評価のありかたを、学生の授業アンケートや FD、教員同士のピアレビューによって恒常的にチェックして改善し、公表するのは当然のことである。

教員が行う授業は重要であるが、大学の教育は授業だけで成り立っているわけではない。サークル活動やボランティア活動、インターンシップ、アルバイトを通じ、実際、学生は社会で必要とするコミュニケーション能力や倫理観などを養っている。正課と課外にかかわらず、何よりも大切なのは、学生が自律的・主体的に活動し、その中で学生自身が成長することである。そして、学生自身が自分の成長を実感し、「新たに知る・体験する」という喜びと達成感をもつことが最も大事なことであり、それがひいては教育の成果につながっていくのではないかと考える。

本 AP 事業には、学生に自分の成長の度合いを自ら評価させるしかけがある。知識・技能は教員によって評価されるものの、社会でたくましく生きていく力や社会人基礎力に相当する資質は、学生自身が評価する。一人ひとりの学生が定期的に自分を振り返って諸能力の改善点と向上点を自分の物差しで測定し、4 年間の成長を e-ポートフォリオに記録し、最終的には独自のディプロマ・サプリメントを作成していくのである。その過程で、人間の能力をどのような基準でどのように評価するかというアセスメントの基礎的なスキルが学生の中に芽生える可能性がある。

平成 29 年度に本 AP の中間評価が実施された結果、本学は最高レベルの「S」評価を受け、当初計画を越えた取組状況であると認められた。後半の 2 年間も引き続いて本学における教育の質の向上と保証および学修成果の可視化を目指し、全学をあげて取り組んでいく所存である。

高知大学大学教育再生加速プログラム事業実施本部長  
国立大学法人高知大学理事（教育・国際担当）・副学長  
奥田 一雄